

壊われかけた砂時計

ひとは皆、砂時計を持っている。砂の粒が落ちきる時間は皆同じであるものの、それぞれ粒の大きさや窓の幅は異なることも確かである。

この砂時計を流れる砂の速度は、私たちにとっての個々の時間感覚のことである。

他者の砂（時間感覚）が混ざり込み、自分の時間感覚が狂ってしまう。そんな淀みが生まれる空間を目指した。

本提案は、自身の砂時計に従順に暮らし、ルーティーンに支配された生活からの脱却を試みる。

粒の異なる他者の砂と自身の砂の一部が入れ替わることで、1日経たずとも砂が落ちきってしまったり、1日で砂が落ちきらなかったりする。

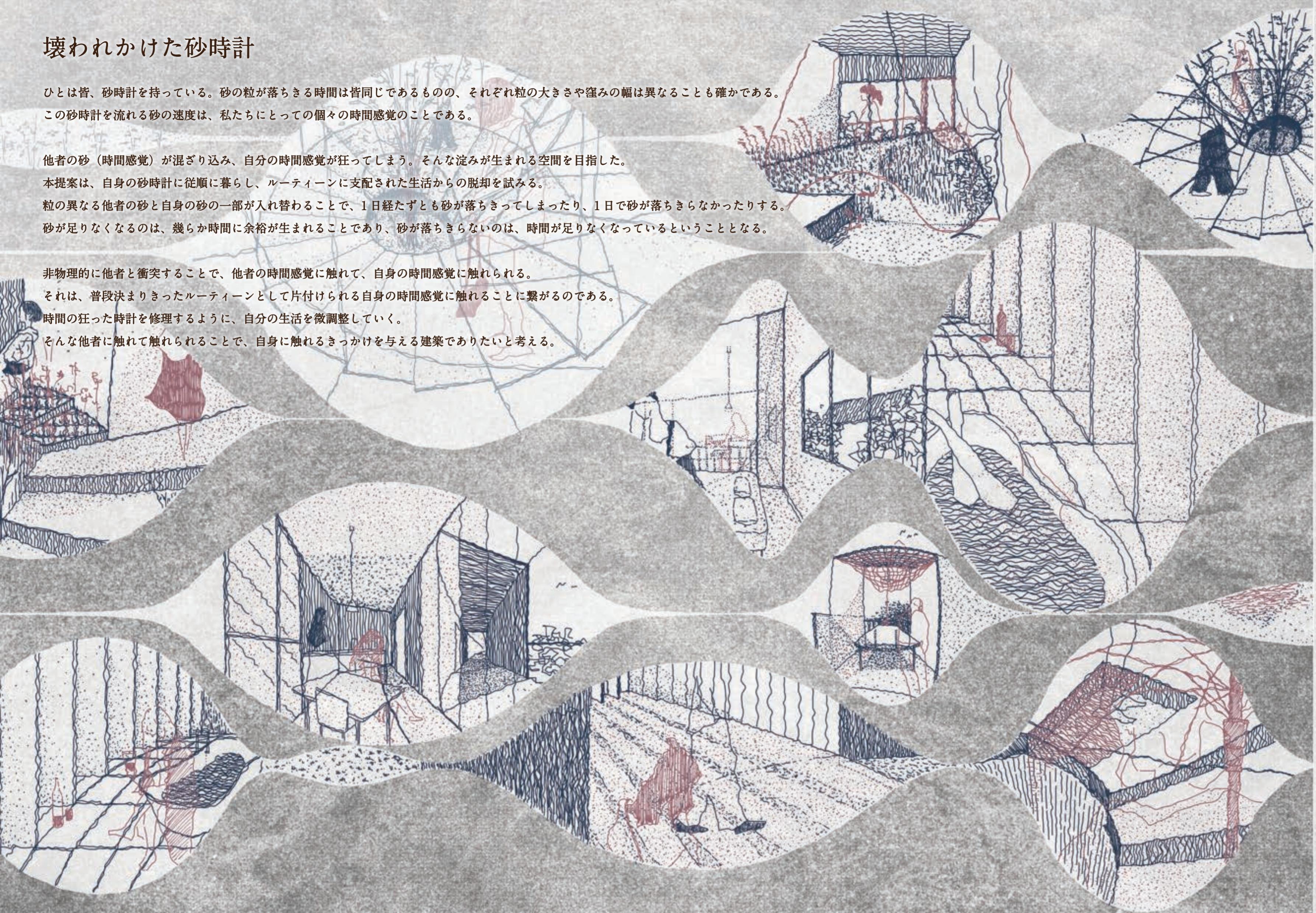
砂が足りなくなるのは、幾らか時間に余裕が生まれることであり、砂が落ちきらないのは、時間が足りなくなっているということとなる。

非物理的に他者と衝突することで、他者の時間感覚に触れて、自身の時間感覚に触れられる。

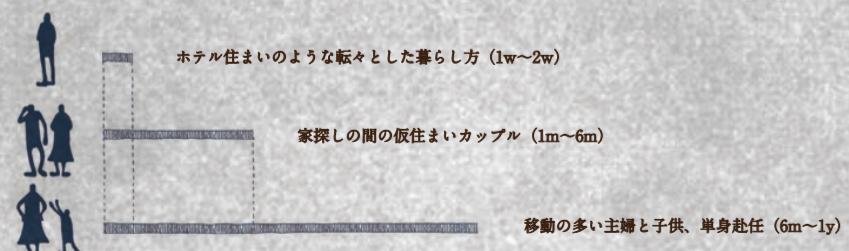
それは、普段決まりきったルーティーンとして片付けられる自身の時間感覚に触れることに繋がるのである。

時間の狂った時計を修理するように、自分の生活を微調整していく。

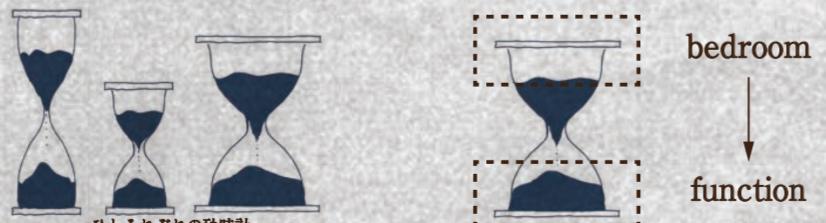
そんな他者に触れて触れられることで、自身に触れるきっかけを与える建築でありたいと考える。



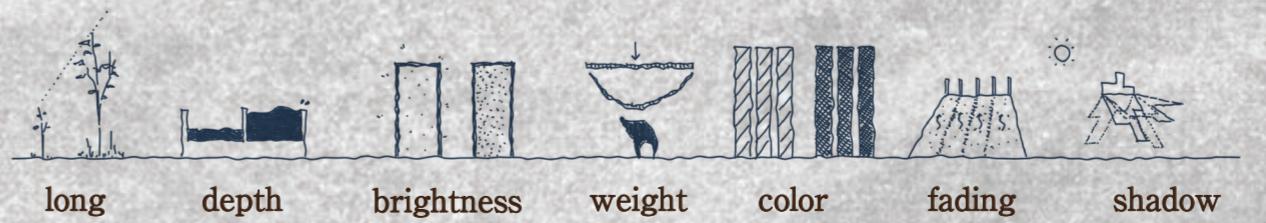
■ 砂時計と仮住まい



■ 暮らしを手入れする



■ 時間を翻訳する



砂時計同様、全住戸において砂が落ちていくように1日が始まる構成とする。砂が落ちていき、また砂時計をひっくり返すように暮らししていく。

単純な構成によって、視覚化された時間感覚だけでなく、目には見えない時間の流れにいつの間にか身をまかせてしまう空間構成とする。

いたずらされた時間感覚を調整することで、触れて触れられ、結局は自身に触れることにつながる。大事なものを丁寧に手入れするのと同様に、自身の暮らしを手入れすることが、私たちには足りていないのかもしれない。

